



第3回コロキウム討論のまとめ(二〇〇一年度第三回 コロキウム)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 弘子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004955

第3回コロキウム討論のまとめ

萩原弘子

議論された諸問題のなかから重要点3つをまとめて報告する。討論では恐縮ながら私の発言が多くなってしまったので、この「まとめ」はあくまでも萩原の報告として書くことにする。

まず第1に、歴史のなかに女性をどういう名前で記述するかという問題について。これは過去の女性の業績をふりかえるときに、多くの場合避けられない問いであり、これまでのコロキウムでもなんとか議論してきたことである。今回で言えばまず、「マダム・デュ・シャトレ」「デュ・シャトレ夫人」と呼ばれ、みずからもそのように名乗った人物の業績の意味を考察したわけだが、高い社会的地位をもつ男性の妻であることを示す「マダム」「夫人」呼称とともに、この女性の業績を歴史に記録するのはどうなのか。いまとなっては彼女の夫君は何者でもなく、「デュ・シャトレ夫人の夫」でしかないというのに、これからも歴史にこの女性を「デュ・シャトレ夫人」として記述していくのがいいのだろうか。この問いに対する答えは18世紀当時の矛盾を反映して単純でないというのが、議論の末にわかったことである。

彼女が自然学の分野で残した業績は、彼女が婚姻で得た地位、およびその婚姻を可能にした生家の社会的地位と深く関わっているから、その関係がわかるように歴史に記述したほうがよいということはあるだろう。男性科学者たちにもその業績を可能にした社会的背景があるはずだが、そちらについては一目でわかる指標を付けることはしない。男性優位社会では男性は無標の個人として活動することができる。女性も同様に無標の個人として活動できた歴史がもしあったなら、そのように記録すればよいが、そういう歴史はなかった。18世紀に男性優位の領域で女性が科学したことのただならぬ意味を歴史に記述するには、エミリ・ル・トヌリエ・デュ・ブルトゥユとしたり（ブルトゥユは生家の姓）、エミリ・デュ・シャトレとするより、むしろマダム称を付すほうが当時の現実をよく示すのではないか。以上のような意見が出された。

それと関連して、女性をファースト・ネームで記述することについても、

いくつかの見解が出された。歴史の本編に登場する人（男性が多いわけだが）、たとえばニュートンをアイザックと、ラヴォワジエをアントワーンとだけ記述することは行なわれていない。川島論文の文献表中にあるよく知られるエリザベト・バダンテールの本は表題にファースト・ネームを並べている（*Emilie, Emilie*、邦題『二人のエミリー』）。私の知る美術史の分野で言えば、ファースト・ネームで呼ばれてきたのは圧倒的に女性であり、これが女性の業績を過小に評価する姿勢の表われであることはすでに議論されて久しい。たとえばアルテミジア・ジェンティレスキは、いまや父オラツィオ・ジェンティレスキよりも重要なマニエリスム画家とされるようになったが、それでも「アルテミジア」と称される（たとえば、この画家を題材とする近年の映画のタイトル）。父ジェンティレスキと区別するためというのもあるだろうが、区別のためならいまや単にジェンティレスキと言えば娘のことで、父に言及するときはオラツィオと呼ばばよいと思うのだが、そういうことは起こっていない。アルテミジア・ジェンティレスキのように、後世にはあっても父を凌駕する位置づけをされるようになった女性は少数だ。女性を周縁化するそうした状況を再生産しないために、男女いずれもフル・ネーム記載をと主張してきた歴史研究者は多く、私もこの見解を支持してきた。

しかし、女性をフル・ネームで記載しても、その姓は生家か婚家の父権血統を告げるものだ。そうなるとむしろファースト・ネームこそは彼女自身の名前であるのだから、両性いずれもが無標の個人として活動し、いずれもがフル・ネームで記録されるようになるまでの過渡期には、女性をその人自身の名で呼ぶ方法として、手放さないほうがよいのではという意見も出された。私自身は、歴史記述そのものが次の歴史をつくる力をもってしまうので、「過渡期」はどこかで断ち切らないことには「過渡期」に終わりはないという意見だ。しかしたしかに、フル・ネーム記載をすることで18世紀当時の女性をとりまく状況がまるでなかったかのようにみえることには警戒が必要だろう。歴史に記述するのは人名だけでなく、文脈も書くわけだから、文脈をどう書くかと併せて考えていくことが重要となろう。

第2の論点は、科学的真理の中立性について。まず私からした指摘は、

科学的真理の中立性がどこへ向けて主張されるかについては、大きな変化があったということだ。つまり川島さんの発表で指摘されたように、18世紀も特に前半には、科学的真理は中立的なもので、したがって性別とは関係がない、男女で真理からの距離が違うということはないと考える流れもあった。人間は神の摂理に従うだけの存在ではなく、世界をモノとモノとの関係として人間理性によって説明し尽くせるというのは、啓蒙の時代の新しい世界観、人間観であった。真理は中立で誰にでも開かれている。これはラディカルな解放の思想となりうる。ところが、科学的真理の中立性という主張は、やがて方向を変えて、その偏りのない真理の解明に貢献することが女性には少なかったのだからとして、科学的真理の追究といった大きな仕事に女性が不向きであることの証左であるといった、女性排除の主張となる。普遍・不偏の真理の解明にとりくむ「人間」と、それをよくなしえない「女性」という二分である。その変化の時期については慎重な考察が必要だろうが、ジャン＝ジャック・ルソーが1760年代にした主張（『エミール』中にある、抽象的、理論的な真理の探究、諸科学の原理の探究などには女性には不向き、という旨の主張）などを考えると、かなり早い時期に起こったのではないだろうか。

第3の論点は、そのことと関連して、科学的真理は、科学への女性の参加で変わるかという問題について。まず、科学的真理の中立性のモデルが数学と物理学であったことは、西洋近代の科学とはなにかを語っているという指摘が川島さんからされた。科学的真理の解明と言っても、なにを解明するかという問題の設定にはジェンダー・バイアスが含まれるはずだ。そのことがよくわかるのが生物学や医学である。しかし数学や物理学のほうは「偏りのない普遍の真理」とされ、その解明こそは科学の理想であり、生物学や医学もそのようになることをめざしてきたのが近代科学の歴史である。

それを言い換えれば、計量と数式化の欲望である。数量を計測し、世界を数式で説明すること、数学的方法による森羅万象の自動的記述をめざすことは、西洋近代科学の特徴のひとつだ。暦や航海術の必要から天体の動きを計測した文化は中国をはじめとして西洋のほかにもあるが、暦をつく

るにとどまらず、数学をモデルとして諸学の体系をつくったのは西洋のほかにない。では数学が中立的真理かという問いの答えは、いまのところわからないというほかない。その問いは、女性が参加すれば科学は変わるかと言い換えられるだろうが、川島さんによればその答えは、いまはあまりに女性が少なすぎてわからないとのことだ。計量じたいは性差と無関係であっても、何を計量するかには社会的な性差が関わるだろう。また計量と数式化という近代科学の姿勢も歴史の産物であるなら、それに参加するばかりが科学ではないことにもなる。知識はなんのためかという大きな問いの前に立つ思いがしたコロキウムであった。